わたしの聖戦（ジハード）

女性が働くということ ―― 173

医学ジャーナリスト・医学博士　植田美津恵

本物と偽物のあいだ

てっきり本物だと思っていたものが、実は偽物だったと分かった時、人は、湧き起こる驚きと好奇心と虚しさを抑えることができない。

人気番組「なんでも鑑定団」に、真贋問題が浮上したのは昨年の暮れだった。世界に3つしかないといわれている「曜変天目茶碗」が持ち込まれ、番組内で著名な鑑定士が「本物」と太鼓判を押し、2500万円の値をつけたのが事の始まりである。ところがこの茶碗に対し、陶芸家や歴史家、大学関係者などから「偽物ではないか」との物言いがついたのだ。

「なんでも鑑定団」は1994年にスタートし、今では長寿番組として変わらぬ人気を誇っている。一般視聴者の家に伝わる絵画やら壺やら掛け軸やら、そういった類のものがスタジオに登場し、専門の鑑定士が眺め触れ…、その結果を鑑定する、つまり価格をつけるという流れになっている。たぐいまれな家宝と思い込んでいたものが偽物だったり、価値があるのかどうかわからない代物が何と大変なお宝だったり。鑑定結果が価格として表示されたときの出品者の驚きや落胆の場面がこの番組のハイライトだ。テレビを観ている私たちも出演者と同じ驚きを味わい、

我が家にももしかしたらとんでもないお宝が眠っているのかも、と期待を抱かせる演出も実にうまい。だからこそ、これだけ長く続いているのだろう。

有名な贋作事件として思い浮かぶのは、オランダの画家メーヘレンだ。彼は、第二次大戦時、フェルメールの画風を真似て描いた複数の絵を、フェルメールの絵と称してナチス高官に高額で売ったのだ。裁判の際には皆の前でフェルメール風に絵を描き、自分の犯罪と確かな贋作の腕を証明してみせた。今でこそ、X線などを使って調べる方法があるとはいえ、美術品を偽物か本物か見分けるのは、決してたやすいことではないはずだ。

ドイツを訪れたとき、どうしても行きたい場所があった。ミュンヘンにあるピナコテーク（美術館）だ。そこには、1400年代に活躍した画家、デューラーの自画像があると聞いていた。ロクな地図さえ持っていなかったのに、一目見たさに人に尋ねながらひたすら歩いて向かった。ところが、行けども行けどもそれらしき建物が見当たらない。

時間ばかりが経ち、足も疲れ、途方に暮れかかっていたそのとき…。デューラーの顔が真っすぐ私の視界に飛び込んできた。デューラーの自画像が大きく引き伸ばされ、ピナコテークの入り口に掲げられていたのだ。みずからを神に見立てて描いたとされるその絵は、まさに異国の知らない街で迷い困り果てていた私を救ってくれた「神」そのものだった。

深い感激を胸に、そのまま夢見がちに中を観て回った。小さな額に収まった本物の自画像も素晴らしかったが、私を導いてくれたかのような画布の自画像のインパクトが強すぎて、そちらのほうがしばらく目に焼き付いてしまった。

絵画とは、美術とはそういうものかもしれない。観る者の気持やそのときの感情によって、さらに光輝き感銘を与えてくれる、瞬間の一体感。そこに芸術の醍醐味があるのではないだろうか。

冒頭に触れた「なんでも鑑定団」は、再鑑定はしないと一貫した態度を示している。批判もあるが、もともとバラエティなのだからそれでいいではないか。芸術品とは、その真贋も含めた「歴史的産物」である。本物と信じていたものが実は…、などというミステリアスなところも、文明を彩ってきた芸術品の一側面なのだと思う。

イラスト・伊藤栄章